TADOKU JUNIOR はじめての名作童話 ★★★★☆ ながい 1034語

# Aladdin, or the Magic Lamp (3)

## アラジンとまほうのランプ（その3）

Katharine Pyle（1918年の本） 原文そのまま 朗読：James K. White

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ ごてんもおひめさまも消えて、王さまはかんかん。40日のうちにおひめさまを見つけなければなりません。わすれていたあのゆびわが、アラジンを助けます。

That evening the Sultan and Aladdin came home from their hunt. They rode along together, talking pleasantly, until they came within sight of the Sultan's palace. Suddenly the Sultan drew rein and stared with blank surprise. The castle that Aladdin had built in a single night was gone. Not a sign of it was left.

"Your palace!" cried the Sultan. "Where is your palace?"

Aladdin, too, stared thunderstruck. "I—I do not know!" he faltered.

"You do not know?" cried the Sultan. "And my daughter! Where is she?"

"I do not know," answered Aladdin again.

The Sultan was filled with rage. "You do not know!" he thundered. "Miserable wretch! was your castle only the work of enchantment? Have you carried off my daughter by your magic? Now unless you bring her back at once you shall surely die."

Aladdin was in despair. He begged the Sultan to allow him forty days in which to search for the Princess, and to this the Sultan at last consented.

Aladdin at once set out on the search, but he did not know in which direction to go. He wandered about from one place to another, without learning anything about the fate of the Princess or his palace.

At last one day he found himself in a rocky spot beside the sea. In descending the rocks he slipped and caught his hand on a sharp point, and in so doing he rubbed the magician's ring which he still wore, but which he had forgotten.

At once the genie of the ring appeared before him. “Master,” said he, “what wouldst thou have? I and the other slaves of the ring stand ready to serve thee.”

Aladdin was overjoyed to find that the ring still kept its magic powers. “I wish,” said he, “that you would bring back my palace and the Princess, or else take me where they are.”

“I cannot bring them back,” answered the slave of the ring, “for they have been carried away by the genie of the lamp, who is mightier than I, but I can take you where they are.”

The slave of the ring then caught up Aladdin, and in less time than it takes to tell he had carried him to Africa and had set him down in the apartment in the palace where the Princess was.

When the Princess saw Aladdin thus suddenly appear before her she gave a cry of joy and threw herself into his arms.

“The lamp!” cried Aladdin. “Where is the lamp?” for he wished to protect himself against the power of the magician.

“Alas,” cried the Princess, “I do not know where it is. Already I feared that all our misfortunes had come from my trading off that lamp to a beggar.” She then told Aladdin the whole story of how one had come offering new lamps for old, and of how her women had hunted up the old blackened lamp, and she had given it away for a new one.

Aladdin at once guessed that the beggar must have been the magician in disguise. “We will never be safe,” said he, “until we have that lamp in our possession again. Does the magician ever come here?”

“Oh, yes,” said the Princess; “he comes here every day and wearies me with his pretty speeches. He wishes me to marry him, but that I will never do.”

“Now, listen,” said Aladdin. “The next time the magician comes greet him pleasantly. Talk to him for awhile, and then offer him a glass of sherbet. In this

sherbet you must first put a powder that I will give you. It is a sleeping-powder. After the magician drinks it he will fall into a deep sleep. You must then at once call me. Together we will search his clothing, for I feel sure he is afraid to leave the lamp anywhere, and carries it always about him. If we can once get hold of the lamp all of our troubles are at an end."

The Princess promised to do exactly as Aladdin bade her, and then he gave her the powder, and hid himself in a room near by.

Not long after this the magician came, as usual, to sit and talk with the Princess. She met him with smiling looks, and was so pleasant and friendly that the magician was delighted. He hoped the Princess was beginning to love him and that before long she would consent to be his wife.

Presently the Princess took up a glass of sherbet in which she had already dissolved the powder. "I thought you might be thirsty," said she, "and I prepared this sherbet for you; will you not drink it?"

The magician thanked her, and taking the goblet he drank the sherbet at one draught. Almost at once his head dropped back on the cushions and he sank in a deep sleep.

The Princess did not delay a moment in calling Aladdin. He came in haste, and together they searched the garments of the magician. It did not take them long to find the lamp, which was hidden in his vest.

Aladdin rubbed it, and the genie of the lamp appeared before him.

"What dost thou wish?" he cried. "I and all the other slaves of the lamp stand ready to obey thee."

"First," said Aladdin, "I wish this magician carried away to the uttermost parts of the earth, and I wish him never to be allowed to come within a hundred miles of the lamp again. Secondly, I wish my palace to be returned to the place from which it was taken."

“To hear is to obey,” answered the genie.

He disappeared with the magician, and as the magician never was seen again he probably never escaped from the ends of the earth.

As for the palace it and all that was in it were returned to the place where it first stood, and the Sultan was so delighted to see his daughter again that he gladly forgave Aladdin. The tailor’s son was raised to the greatest honors in the kingdom, and upon the Sultan’s death he became Sultan, and lived happy forever after with his beautiful wife, Buddir al Baddoor.



その夕方、王さまとアラジンは、かりから帰ってきました。ふたりは楽しく話をしながら、ならんで馬に乗ってきて、王さまのごてんが見えるところまで来ました。とつぜん、王さまは馬の手づなを引いて止まり、ぽかんとして目を見はりました。アラジンがたった一ばんでたてたおしろが、なくなっていたのです。あとかたもありませんでした。

「そなたのごてんが！」と王さまはさけびました。「そなたのごてんは、どこへ行った？」

アラジンも、かみなりに打たれたように立ちすくんでいました。「わ、わかりません！」とアラジンは口ごもりました。

「わからないだと？」と王さまはさけびました。「それに、わたしのむすめは！むすめはどこにいるのだ？」

「わかりません」とアラジンはまた答えました。

王さまはかんかんにおこりました。「わからないだと！」と王さまはどなりました。「このならずものめ！そなたのおしろは、まほうで作っただけのものだったのか？そなたのまほうで、わたしのむすめをつれさったのか？すぐにむすめをつれもどさなければ、命はないものと思え」

アラジンは目の前がまっ暗になりました。アラジンは、おひめさまをさがすために40日のゆうよをくださいと王さまにたのみ、王さまはとうとうそれをゆるしました。

アラジンはすぐにさがしに出かけましたが、どちらへ行けばよいのかわかりませんでした。あちこちさまよい歩きましたが、おひめさまやごてんがどうなったのか、何もわかりませんでした。

ある日、気がつくと、アラジンは海べの岩だらけのところに来ていました。岩をおりるとき、足をすべらせて、とがった岩に手をぶつけました。そのひょうしに、まだはめていたのにすっかりわすれていた、まほうつかいのゆびわがこすれました。

すると、たちまちゆびわのまじんが目の前にあらわれました。「ご主人さま」とまじんは言いました。「何がおのぞみですか？わたしも、ゆびわのほかのけらいたちも、おつかえいたします」

ゆびわのまほうの力がまだのこっていたとわかって、アラジンは大よろこびしました。「ぼくのごてんとおひめさまをつれもどしてほしいんだ」とアラジンは言いました。「それができなければ、ぼくをそこへつれていっておくれ」

「つれもどすことはできません」とゆびわのけらいは答えました。「ランプのまじんがはこんでいったのです。ランプのまじんはわたしより力が強いのです。でも、あなたをそこへおつれすることはできます」

そう言うとゆびわのけらいはアラジンをかかえ上げ、話すよりも短いあいだにアフリカへはこんで、おひめさまのいるごてんのへやにおろしました。

アラジンがとつぜん目の前にあらわれたのを見て、おひめさまはよろこびの声をあげ、アラジンのうでにとびこみました。

「ランプは！」とアラジンはさけびました。「ランプはどこ？」まほうつかいの力から、自分の身を守りたかったのです。

「ああ」とおひめさまはさけびました。「どこにあるのか、わからないの。わたしたちのふこうはみんな、わたしがあのランプをものごいにとりかえてしまったせいではないかと、心配していたのです」それからおひめさまは、新しいランプを古いランプととりかえるという人が来たこと、おつきの女の人たちが古い黒ずんだランプをさがし出してきたこと、そして自分がそれを新しいランプととりかえてしまったことを、すっかりアラジンに話しました。

アラジンはすぐに、そのものごいは、すがたをかえたまほうつかいだったにちがいないと気がつきました。「あのランプをもう一度とりもどすまでは、ぼくたちはけっして安心できない」とアラジンは言いました。「まほうつかいは、ここへ来ることがあるの？」

「ええ、ありますとも」とおひめさまは言いました。「毎日やってきて、おせじばかり言うので、うんざりしているの。わたしとけっこんしたがっているけれど、そんなこと、ぜったいにするものですか」

「では、聞いて」とアラジンは言いました。「こんどまほうつかいが来たら、にこやかにむかえてね。しばらく話をしてから、シャーベットを一ぱいすすめるんだ。そのシャーベットには、先にぼくがわたすこなを入れておいてね。ねむりぐすりなんだ。それを飲むと、まほうつかいはぐっすりねむってしまう。そうしたら、すぐにぼくをよんでね。ふたりで、まほうつかいの服をさがそう。きっと、ランプをどこかにおいておくのがこわくて、いつも身につけているにちがいないからね。ランプさえとりもどせば、ぼくたちのこまりごとはみんなおしまいだ」

おひめさまはアラジンの言うとおりにするとやくそくしました。アラジンはおひめさまにこなをわたして、近くのへやにかくれました。

それからまもなく、まほうつかいがいつものように、おひめさまのところへ話をしにやってきました。おひめさまはにこにこしてむかえ、とてもあいそうよくしたので、まほうつかいは大よろこびしました。おひめさまがだんだん自分を好きになってきて、もうすぐおよめさんになってくれるのではないかと思ったのです。

やがて、おひめさまは、もうこなをとかしておいたシャーベットのグラスを手にとりました。「のどがかわいていらっしゃるかと思って」とおひめさまは言いました。「このシャーベットを用意しましたの。めし上がりませんか？」

まほうつかいはお礼を言って、さかずきを受けとると、シャーベットをひといきに飲みほしました。すると、ほとんどすぐに、まほうつかいの頭はクッションの上にがくんとたおれ、ぐっすりねむりこんでしまいました。

おひめさまは、すぐにアラジンをよびました。アラジンはいそいでやってきて、ふたりでまほうつかいの服をさがしました。ランプはすぐに見つかりました。まほうつかいのチョッキの中にかくしてあったのです。

アラジンがランプをこすると、ランプのまじんが目の前にあらわれました。

「何がおのぞみですか？」とまじんはさけびました。「わたしも、ランプのほかのけらいたちもみんな、おおせにしたがいます」

「まず」とアラジンは言いました。「このまほうつかいを、世界のいちばんはてまでつれていっておくれ。そして、二度とランプから百マイルより近くには来られないようにしてほしい。つぎに、ぼくのごてんを、もとあったところへもどしてほしいんだ」

「おおせのとおりに」とまじんは答えました。

まじんはまほうつかいをつれて消えました。まほうつかいはそれっきり二度とすがたを見せなかったので、きっと世界のはてから、にげ出せなかったのでしょう。

ごてんは、中にあるものもみんないっしょに、もとのところへもどりました。王さまはむすめにまた会えて大よろこびし、こころよくアラジンをゆるしました。仕立て屋のむすこは、国でいちばんえらい身分にとりたてられ、王さまがなくなると、つぎの王さまになりました。そして、うつくしいおよめさんのバドルル・バドゥールひめと、いつまでもしあわせにくらしました。

## たんご と クイズ　アラジンとまほうのランプ（その3）

| | | |
|---|---|---|
| **palace** ごてん | **sea** 海 | **ring** ゆびわ |
| **genie** まじん | **lamp** ランプ | **sherbet** シャーベット（あまい飲み物） |
| **cushions** クッション | | |

**Q1** **アラジンをアフリカへつれていったのはだれ？**

① ランプのまじん　② ゆびわのまじん　③ 王(おう)さま

**Q2** **おひめさまは、まほうつかいに何(なに)を飲(の)ませた？**

① ねむりぐすりを入(い)れたシャーベット　② お茶(ちゃ)　③ ただの水(みず)

**Q3** **ランプはどこにかくしてあった？**

① たから物(もの)のへや　② クッションの下(した)　③ まほうつかいのチョッキの中(なか)

**こたえ**

Q1　②　岩(いわ)で手(て)をぶつけたひょうしにゆびわがこすれて、ゆびわのまじんがあらわれ、アラジンをおひめさまのいるアフリカへつれていきました。

Q2　①　アラジンからもらったねむりぐすりのこなをとかしたシャーベットを飲(の)ませたので、まほうつかいはぐっすりねむってしまいました。

Q3　③　アラジンの思(おも)ったとおり、まほうつかいはランプをいつも身(み)につけていて、チョッキの中(なか)にかくしていました。

**原田英語の多読ベストジュニア**
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

**出典**　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #49001（Katharine Pyle、1918年）。パブリックドメイン。
挿絵：Katharine Pyle（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：James K. White（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。